

研究結果報告書

日本における組織と社会倫理：東アジア社会との比較の視座から

所属：韓国 全北大学 教授

氏名：林 慶澤

研究結果

本研究では、日本人の組織倫理の根幹として忠と孝、公と私について、さらに社会を維持させてきた倫理規範として文と武の二元性、そして日本人の「勤勉精神」を主要な対象に設定した。また、倫理的内容を分析するのに止まらず、その倫理が定着し、社会全般に拡散していく過程まで把握するために、国民教育の過程と内容も分析した。

■ 孝と忠の逆転

中国や朝鮮においては、多くの場合、忠より孝を重視してきたが、日本では忠が重要視され、武士道に影響を与えた。日本においては、封建制の時代から主従関係の根幹をなす「忠」、それが一般化して「公」である組織に対する忠誠が一層重要性を帯びるようになった。この倫理は「公と私」の倫理と合致し、日本人の組織倫理の土台になっている。

■ 公と私の両立、そして義理・人情

日本社会における「公」の概念には、首長性と共同性が共存しており、首長性によって人格的・実体的になり、それと同時に共同性によって規範性と倫理性を伴うようになる。日本人にとって、「公と私」は一体の状態であり、「私」は常に「公」に従い、「公」において国家を越えた領域は想定されていない。そのため、日本では公的なことと私的なことが矛盾にならず、両立することができる。公私と関連して強調される言葉が「滅私奉公」である。

また、これと類似した領域を構成する倫理が義理・人情である。義理とは、人間が必ず守るべき道理である。義理と人情は日本社会の共同体的性格と深く関わっている。それを守るために、日本人は相互心理的依存関係を維持しつつ、和の社会関係と人間関係を保っていくことに細心な注意を払っている。

■ 文武両道あるいは文武の二元性

日本における伝統的支配集団であった武家政権は、その成立以降、文武を合体させて政権を維持してきた。平和な江戸時代が到来し、文治主義的傾向が強まると、武士たちは官僚化し、俸禄制度の確立とともに、文武両道という言葉が使われ始めた。また、科举制度が実施されなかった日本では、いわば「知的拡散社会」が形成され、知の梯子と武の梯子が並行する「文武の二元構造」が成立した。これこそ、中国や朝鮮と違った日本の独自性である。

■ 勤労観と勤勉精神

日本人にとって「仕事」とは、単なる労働以上の意味を持っている。その観念と合わせて勤勉はとても重要な徳目である。江戸時代から、浄土真宗、心学、報徳思想、性学などが日本人の勤勉精神に影響を与えており、その勤勉性は近代化の過程で「修身」教育を通じて、日本人の大多数が共有するようになる。福沢諭吉も勤勉を強く説いていた。

このような倫理意識は、国民教育を通じて成功的に日本社会の基本倫理として定着するようになった。江戸時代には、藩校、寺子屋、郷学などの教育機関が普及して教育における平等主義が確立し、組織倫理および社会倫理を共有することのできる土台が築き上げられていた。明治時代になると、いわば「国民社会」が成立した。伝統時代からの規範は、『教育勅語』などを中心に全国民に浸透していった。つまり、『教育勅語』を基軸とし、伝統的な道徳心情や観念を国家道徳へと収斂していった。戦後にも、日本文部省は、既存の修身と公民的知識を結び付けて道徳教育を実施したため、以前の道徳教育の色彩と内容の大部分を受け継がれていった。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

『民族文化論叢』70、嶺南大学民族文化研究所
2018年12月31日刊行

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)

『近代日本における社会倫理の形成』(仮題)を執筆予定。